

会員近況



摂南大学 工学部
経営工学科システム工学研究室

松田 俊彦

水商売のシステム工学 過去 $\frac{1}{4}$ 世紀のあいだ、夜の水商売ではない——昼間の水処理技術の主として研究開発部門での企業活動(ほとんど栗田工業で)に従事してきた。

はじめてこの仕事についてときは、この業界が今日の盛況をもたらし、このような重要性をもつとは夢にも想像していなかったというのが正直なところであった。現今の経済活動の低調化の中でこそ、一時ほどの活気はないが、まだまだ国内的にも、さらには目を世界に転ずれば、無限に近い巨大な需要が横たわっているといっている。

わが国の急速なGNPの伸びにともなって、仕事が忙しくなるにつれ、自分の受けもつ役割について考えなければならぬようになってきた。それは環境問題のクローズアップとともに、果たして部分の最適を求めただけでよいのだろうか、全体——広くは地球的に考えてどのように対処すればよいかに疑問をもつにいたった。ここに最近いわれだしている環境システム工学の存在意義があり、これこそが上述の問題解決の手段であると確信する次第である。

ただいまは、環境工学の見地を踏まえて、その中の水処理プラント(用水および廃水処理の有機的総合見地からの)についての最適設計の手法確立についての研究を展開しようとしており、ご関係の、またはご関心をおもちの方々との交流を希望するものである。

日本エネルギー経済研究所研究部
(昭和石油企画部より出向)

小川 勝嗣

エネルギー不足は本当に起きるのだろうか 数年前から産油国におけるメジャーの後退、新油田開発意欲の減退、OPECの発言力強化などを背景として、1980年代における石油不足を警告する予測がいくつか発表されてきた。一方で、皮肉なことに世界的な景気の立ち直り

が遅く、高価格とはいえ石油の供給過剰気味の現状と相俟って、「不必要に危機だと騒ぎすぎる」という反論をよんでいる。

エネルギーが不足するかどうかというのは、供給可能性と需要の比較だけの問題であって、重要なのは埋蔵量をどう見ているか、需要量をどう予測し、それらを、経済的、政治的枠組みの中でどうバランスさせていくかということであって、この辺のところが論者によってマチマチで整理されていないために、しかも計算の根拠とシナリオが無視されて危機と危機不信の結論だけが勝手に一人歩きして論争しているきらいがある。

たしかにいえることは、10年先かあるいは30年先になるか、ともかくいまのようなプロセスと価格で石油を入手するのはむしろかくなるであろうこと、そして石炭等代替エネルギーの導入にはかなりの高価格、長いリードタイムという犠牲を払わねばならず、そのためには産業構造や社会構造、生活様式まで大幅な変革を余儀なくさせられるであろうということである。これからのエネルギー問題のスタディーには、この構造変化の予測考察がキポイントであろうと思われる。

東京工業大学
工学部経営工学科 真壁 肇

雑務にふりまわされないように努力 昭和40年に上記の学科に着任して以来、すでに、13年の月日を経ることとなって、現在は学科において、もっともこき使われる立場となっているが、勉強のほうも手を抜かずに行っているつもりである。いまは、隔週の水曜ごとに信頼性の研究会を開き、この分野のORの研究結果について時代遅れとならないよう努力している。ここでは、Annals of Probability, Statistics, Technometrics その他より目ぼしいものをとりあげているが、なかなか面白い論文も多い。

他に、現在は品質管理学会のほうにもよく顔を出している。信頼性には泥くさい面もあるので、また、これらが重要だと思っているので、こちらにも品質管理学会を通じて勉強しているところである。ある意味では、OR屋さんも、もっと泥くさくなくてもよいなと考えてもいる。

東亜燃料工業
情報システム室 小田部 斉

学際的情報交換の場としてのOR学会 世にいろいろの学会があるが、当OR学会ほどに研究対象の自由な学会はないと思う。したがって、会員の構成も、その出身学科といい、所属企業体といい、多種多様であって、これほどに学際的な大集団は珍しいし、また、これがOR学会の最大の特徴であるといえよう。

ところが、近頃、当学会員の声に、学会から受ける実利的メリットが少ないという意見が多いと聞くが、どうも、これはあまりにも近視眼的、消極的発想から出ていると思う。むしろこの際発想の転換をして、積極的に学会活動に参加し、学際的な他分野の人々との交流を通じて視野を広げ、不確実性時代の変化を先取りする感覚を養う場として、学会を大いに活用したらよいのではないか。

さて、そのような場として、まず学会員相互によるインフォーマルなサークルを地域的に結成することをおすすめしたい。たとえば、学会の長老によってはじめられ、現在、私も世話人の末席を汚している「丸の内ORクラブ」は、この5月で104回を迎えた。地味だが、長

い年月、幅広いテーマをとらえて、価値ある本音の情報を交換してきたことは、レギュラーの面々にとっては、相互に裨益するところ、誠に大きかったと先日の例会でも述懐し合ったのである。クラブづくりの有志にはノウハウをお伝えしたい。

電通公社
経営調査室 江副 力

仕事に関連して、日本人が国内でどのように移動しているかに関心をもっていますが、移動にもなって現在進みつつある一つの現象に気がきました。

それは、人口の上位35都市(全人口の4割弱を占める)間での平均的な人口格差が、過去10年間にわたって滑らかに減少していることです。

すなわち、35都市を人口 S の大きさ順(R であらわす)に並べれば、 $\log R$ と $\log S$ との関係はほぼ直線になることはすでに知られておりますが、実はこの直線の傾斜が過去10年間にわたって、毎年1%弱ずつ滑らかに減少しているのです。

ところで現在の日本は、人の考え方や行動の均一化の速度が極端に上昇している時代ともいえるのではないのでしょうか。

新フェローの紹介

フェロー会議より理事会へ新フェローとして朝尾正氏が推薦され、
4月5日の理事会で承認されましたのでご紹介します。

朝尾 正 (あさお まさし) 氏

大正11年1月7日生
現住所 大阪府堺市若松台
3-30-1

学歴

昭和19年 東京大学医学部薬
学科卒業

職歴

昭和19年 山辺製薬株式会社入社(研究部)
昭和29年 同社生産部品質管理課長
昭和34年 // 生産管理部長
昭和40年 // 経営計算センター副室長



昭和46年 // 解析計算室長
昭和51年 // 経営計算室長
昭和45年より 大阪府立大学工学部(非常勤)講師
昭和50年より 関西大学工学部(非常勤)講師
共編著
シミュレーション入門、品質管理ハンドブック
最新実験計画法、他
OR学会役員
理 事 昭和33, 34, 41, 42年
副 会 長 昭和50, 51年
評 議 員 昭和32年より現在まで
編集委員 昭和32年より44年まで